

2018.10

秋冬

No.107

思文閣出版

鴨東通信



平家朝人 一ひめのあし
てりく日へさある中
そり孫のあそび
ん人のくろさうに
く

❖ 日常語のなかの歴史 20
レタス【菫苜】

◆ 須田満

❖ てーたいむ

社会からみえる天皇制
天皇制からみえる現代

◆ 高木博志 ◆ 田中智子 ◆ 福家崇洋

作品調査の魅力

◆ 河田昌之

農学者と風土

◆ 玉井浩嗣

「ムラの戸籍簿」を作る

◆ 花田卓司

余は如何にして

『御堂関白記』研究者となりし乎

◆ 倉本一宏

❖ リレー連載(新) 先読み! 二〇三〇年の人文科学
美術史研究の情報共有

◆ 江村知子

❖ 史料探訪 68

能の絵画化

◆ 長田あかね

—『絵入謡本』『あふひの上業上』の挿絵をめぐって—

朝日カルチャーセンター・
京都教室

思文閣出版

コラボ企画

思文閣 文化サロン

教養・趣味など多彩な講座を展開する朝日カルチャーセンター・京都教室とタッグを組み、思文閣出版選りすぐりの著者による講座を、毎月開催します。毎回、編集者イチャオシのテーマをご用意してご参加をお待ちしています。

第14回

10月27日(土) 13時30分 @ ぎやらりい思文閣
講師：三浦俊介(立命館大学非常勤講師)

「貴船神社の神話と物語」——貴船神社の神と鬼——

今回は貴船神社の縁起物語「貴船の本地」と、二種類の神話に焦点を絞ってお話します。「貴船の本地」は鬼の娘と青年貴族が命がけの恋をして添いとげた後に貴船の神となったと説くものです。また神話には、女神が「黄舟」に乗って川を遡上して鎮座した神話と、神が鬼を連れて貴船山に降臨した神話があります。貴船神社の縁起の多様性について論じたいと思います。

《関連図書》『神話文学の展開——貴船神話研究序説』定価：本体一、二、〇〇〇円(税別)

第15回

11月21日(水) 13時30分 @ 京都御苑「拾翠亭」
講師：倉本一宏(国際日本文化研究センター教授)

「この世をば千年と『御堂関白記』——藤原道長の故地を歩く——

有名な「この世をば」の歌に触れた道長の「御堂関白記」と、この歌を記録した藤原実資「小右記」を写真版と共に解説します。また、この歌が詠まれた本宮の儀の總座(二次会の宴席)の画期性を当時の政治情勢と絡めて解説します。講座は道長直系の九条家の屋敷跡、九条池「拾翠亭」で行ないます。その上で、平安宮内裏を髣髴させる京都御所を訪れ、往時を偲びます。

《関連図書》『御堂関白記の研究』予価：本体八、〇〇〇円(税別)

第16回

12月15日(土) 11時 @ 清和荘
講師：的場輝佳(奈良女子大学名誉教授)

「四季折々の『和食』の魅力」——ユネスコ無形文化遺産になった背景——

近年、我が国ではライフスタイルの変化に伴い食生活の質の低下が危惧されています。一方、二〇一三年和食文化が「ユネスコ無形文化遺産」に登録されて以来、国内外で和食が注目を集めるようになりました。郷土の季節行事とも結びついた和食の魅力と背景を探り、次世代に継承することの意義について考えてみたいと思います。※京都伏見の料亭「清和荘」での昼食付

《関連図書》『和食手帖』定価：本体一、五〇〇円(税別)

朝日カルチャーセンター・京都教室

〒604-8005

京都市中京区河原町三条上ル京都朝日会館8階

tel: 075-231-9693

<https://www.asahiculture.jp/kyoto>

詳細はwebへ→<https://www.shibunkaku.co.jp/>

朝日カルチャーセンター
朝日JTB・交流文化塾

- ◆お申し込み・お問い合わせ
朝日カルチャーセンター・京都教室【要予約】
- ◆受講料は各回で異なります

日常語のなかで、

歴史的語源や

エピソードを取り上げ、

研究者が専門的視野から

ご紹介します。

日常語の なかの歴史 20

レタス



莴苣

ヘロドトス著『歴史』に、ペルシャ王カンビュセス二世はエジプト遠征時の食卓で、妃にバラバラになった王家の比喩として「葉を掻いたレタスと葉の付いたレタスとでは、どちらが綺麗に見える」と尋ねられたとある。紀元前五二五年のことである。

レタスは、遅くとも八世紀の初めに中国経由で日本に伝来し、和名はチサまたは訛ってチシャという。『農業全書』（二六九七）には、「苗を食し、い

つもやはらかにして腹中をなめら

にし色々料理に用ゆる物」とあるが、

落語「夏の医者」やその原話である

「蛇の毒あたり」（二七六五）では「夏

のチシャで腹に障った」農夫が登場

する。その息子と医者二人は、山で大蛇に飲み込

まれるが下剤を撒いて脱出に成功。ところが腹中に

忘れた薬箱に気づき、大蛇にもう一度飲んでくれと

頼むが断られてしまう。いわく、「夏のイシャは腹

に障る」と。

それでは、高度成長期の日本にサラダの食材として定着したチサの現代語表記「レタス」は、いつ頃から使われたのだろうか。

『家庭応用洋食五百種』（一九〇七）には「レ、ハ、ス、坎珂山人は明治屋「嗜好」（一九一八）に「レ、ツ、チ、ス」と書き、『仏蘭西料理全書』（一九二三）には「レイ、チ、ユ」とあるが、『西洋蔬菜の作り方』（一九三三）に初めて「レ、ハ、ス」の表記を見つけた。

だが、WEB公開のスタンフォード大学「邦字新聞デジタル・コレクション」で「レタス」を検索すると、一九〇九年以降のカリフォルニア州で発行された「日米」「新世界」「羅布日報」等に大量の記事がヒットした。二十世紀初めにアメリカで改良された氷詰輸送に適した球状レタスを日系移民は栽培し、一九一五年頃からシカゴや東海岸の都市まで貨車輸送し、一九三〇年頃には横浜港向けに船で輸出した。ルーマニア出身の移民作家コンラッド・ベルコビッチは、「カリフォルニアの日本人」（一九三五）の中に、日系二世の子供に「レタスは日本語で何というの」と質問したところ、「レタスはレタスだよ」と返答された挿話を残している。肉食に合うパリッとしたレタスが、日本よりも半世紀以上も前にアメリカの日系移民社会で定着していた証かもしれない。

（須田満・翁久允財団代表理事）

てーたいむ

社会からみえる天皇制 天皇制からみえる現代

高木 博志

(京都大学人文科学研究所教授)

田中 智子

(京都大学大学院教育学研究科准教授)

福家 崇洋

(京都大学人文科学研究所准教授)

——近代天皇制を、社会による受容という視点からひもといた論集が刊行されます。近現代史の抱える課題も見据えながら、本論集についてお話しいただきます。

■研究会「近代天皇制と社会」開催にあたって

高木…ここ二〇年くらい、天皇制の研究は明治・大正・昭和の天皇個人、あるいは天皇のイメージを扱うものが多くなっています。また五年に一度行われるNHKの日本人の意識調査(二〇一三年)によると、今日の天皇制に対しては、好感ないし尊敬の念を持っている回答者が約七割なんです。一九世紀から二一世紀を通じて天皇制は、江戸時代の朝廷、戦前の天皇主権の時代、それから戦後の象徴天皇制という変遷をたどるわけですけども、今はお

そらくもっとも高い支持率の時代の一つではないか。そうした今日の天皇制への高い支持を生み出した理由を、社会から考えていく。しかも明治維新から戦後までを通じて考えたいと、そういう問題意識がありました。

福家…この研究会が行われたのは二〇一二〜一六年度にかけてです。時間をかけて研究会を行うのは、京都大学人文科学研究所の特徴で、じっくり問題意識を深めていくのは、とても意味のあることだと思います。とりわけ、天皇制の研究者だけではなく、いろいろな専門の方が集まって、天皇制とは何かを考えている点が重要ですね。

■それぞれの視点から見た近代社会

高木…田中さんは明治前期の森有礼暗殺事件について論じられました。明治のごく早い段階では天皇という存在そのものがあり社会に浸透していなかったわけですが、明治維新後、いろいろな近代化を行うときに、天皇が「文明」（＝近代化）の担い手としてあらわれる。そういう一九世紀の天皇の役割は、二〇世紀とはちよつと違いますよね。

田中…そうですね、一九世紀におきた森の暗殺は、むしろ文明なるもののへの反発なのかもしれません。この事件は、実際のところは結局闇のなかですけれども、文明的な人物と目されていた森が、伊勢神宮で不敬を働いたと報道されたことで、憤った国粋主義者・西野文太郎に殺されてしまうというものです。

この報道のなかで、文明を象徴するアイテムとして森に持たせたものがステッキと靴であり、「文明」の立場をふりかざして土足で神殿に上がる行為をもつて批判しています。しかし『日出新聞』が載せたこの事件のパロディ小説では、森を小森という大名になぞらえるのとともに、文明的であることを西欧風ではなくて中華風に置き換えることができているのが、ちよつと意外でした。社会レベルでの「文明」なるものの認識は、一八八九年くらいでも幅があると感じましたね。

一方で、文明と野蛮という軸のなかでいかに文明の立場を保つかということが、当時の日本政府としては一番気にしたところです。森を殺してしまう社会もさることながら、その犯人を袈裟懸けに切ってしまうという、いかにも非文明的なことが政府レベル

でおこり、しかも検死も満足にしないままに葬ってしまった。手続きの非近代性と言いますか、この事件はそれをどう取り繕うかということでも右往左往した過程だと見ています。

それと、自分の関心から言いますと、今回の論集では扱われていないのですが、やはり天皇制と近代社会といえ、社会事業のような領域に恩恵を与える者として積極的に携わっていく天皇像があります。これは今日にまである程度引き継がれる、皇族なり皇室なりが担う重要な機能だと感じます。私が今回扱った一八八八～八九年以降になつてその機能は強く出てくると思うので、今後機会があれば、その点を調べてみたいです。

福家…私は、天皇機関説に端を発した国体明徴運動における、神道系宗教団体の大本と、法華宗系仏教団体の国柱会こくちゅうかいについて論じました。一九三〇年前後の社会と宗教運動がどういう関係にあった、しかも天皇制とどのようにかわつていったのか、という点を調べてみたいと思いました。

従来の天皇制研究というのは、いかに国民を統合していったかという側面に比重が置かれていたように思います。私は専門が社会運動史ですので、統合よりも、社会から逸脱する人びとがどういう動きをしていたのかを、以前から考えてみたいと思つていました。今回は宗教運動のなかでも、国柱会と大本という政治進出しようとした二つの宗教団体をとりあげて、彼らが天皇制にたいしてどう向き合つたのかを考えました。

彼らは一九三〇年頃の政治運動において、理念、もしくは虚焦点としての天皇（現存する天皇ではなく觀念上の天皇）を顕彰していく



田中氏

なかで、天皇をどのようにとらえていったのか。一方で彼らが天皇制にたいしてかつこ付きの「顕彰」をしつつ、同時に現実の天皇制からどのように逸脱していこうとしたのか、という部分を描きたいと思いました。

田中…福家さんが宗教問題、宗教運動というふうには、

マを広くとられていたのは面白いなと思いました。ただ、大本は私には独特な立ち位置の宗教に思えます。もうちょっと宗教一般に広げたうえで、この時期の宗教の立ち位置を天皇制との関わりで論じるとどうなるのかなと思いました。

福家…そうですね、仏教や他の神道系の団体に言及しているわけではないので、私も大本だけ、国柱会だけでは弱いなと思っていました。なのであえて二つを論じよう、一緒に論じることの特徴が浮かび上がるかなと思って、そういう書き方をしました。ただ、それでも二つとも当時の宗教団体のなかではかなり特異な位置にあるというか、かなり政治的に踏み込んだ団体だったので、もう少し一般的な宗教団体にも広げて考えないかと思いますが。

■顕彰と歴史観

高木…今回、神武天皇・南朝・明治維新を近代日本の三大顕彰と、

勝手に言ったんですけれども、それらがそれぞれの時代の文脈によってどう変わるか、各時代で「歴史」の何を切りとっているのかというのが、一つのテーマとしてありました。

福家…時代によってその三つが入れ替わりつつ、せめぎ合っていくという、そういう感じですよ。

高木…そうですね、明治維新が顕彰されるのはある程度あとの時代になってからですけど、神武天皇や南朝は早くに顕彰が始まります。時代によってアクセントが置かれる「歴史」が違う感じですね。南朝は大逆事件や南北朝正閏論のあとになって非常に重要視されますが、明治維新が注目されるのは昭和初期、昭和天皇即位礼の時期だと思っています。そういう顕彰が二〇世紀になると、同時に、重層化して出てくると思います。

福家…地域的な偏差はどうでしょう。たとえば南朝だったら大阪とか神戸とか関西が多いと思うのですが、神武天皇だったら九州、明治維新だったら全国というふうになるのでしょうか。

高木…たとえば大正期以降、修学旅行では国民道德的な場所、関西だと南朝史蹟を回りますが、関東だと泉岳寺など赤穂義士関係の場所が選ばれています。歴史顕彰の問題は、ローカルアイデンティティ、いわばお国自慢の問題ともかかわっていて、たとえば大阪城は、上町台地^{うめまち}の一番北の端に位置しますが、あそこは歴史が重層しています。難波宮があつて石山本願寺があつて、秀吉や徳川の大坂城があるわけですよ。しかし復元されたのは豊臣秀吉の大坂城でした。仙台だと、一八八九年以降に賊軍（旧幕府軍）が許されたことで、伊達政宗がローカルアイデンティティになっ

ていく。金沢では前田利家が、奈良では古代が顕彰されます。

■顕彰と地域

田中…顕彰の契機ということと言えますと、旧制高等学校が作られる時には、地域の近世以前の教育的な事業がクローズアップされて、地域の物語が作られていきました。

高木…明治二〇年代というのは、大日本帝国憲法発布による大赦で戊辰戦争以降の「賊軍」となった罪を一応許して、臣民としておおつぱらに、旧藩時代の歴史を語ることができるようになった時期です。そういう地域の復興と、各府県の学校が旧藩時代の伝統をクローズアップしてローカルな特色を打ちだしていくというのは、パラレルなことではないですかね。

田中…担い手はどんな人たちでしょうか。学校の場合は、二〇世紀初めくらいまでは地方議員やその地方出身の中央官僚、財界人

の働きが強いように思います。

高木…単純化していうと、やっぱり士族なんですよ。たとえば仙台でも初期の市長は上層の士族です。金沢でもそうですね、日露戦争の時期ぐらいまでは県議会などでも士族層が強く、明治末あたりから新興の商工業者に変わっていくと思います。

田中…教育界ではもう少し早く、たとえば金沢の第四高等学校では一八九〇年前後の創設当初から、士族だけではなく商工業者が寄付をしています。それまでは士族のものであった高等教育機関に商工業者が加わってきて、地域の主体になってきています。

高木…日清戦争のあった一八九〇年代ぐらいから、いろいろなものが大衆化してきているように感じますね。たとえば二〇世紀になると城が観光資源になっていきますが、「城」や「前田利家」は江戸時代には武士だけのアイデンティティでした。それが、商工業者も含めて金沢市民や石川県民全体にとってもそういう認識になっていく、歴史が大衆化していきます。

田中…高等教育も大衆化まではいかないかもしれませんが、誰のものかという範囲がまさに広がっていく。

福家…国民の武士化というか、武士道化みたいなものが進んでいくという捉え方ではないのでしょうか。

高木…そうですね。ただ、国民の武士道化とは結局農民が武士化（軍人化）すること、新しい武士になるっていうことだと思います。ほんまもんの士族が地域社会で力を持っている時は、天皇よりは旧藩主の方が崇敬の対象だと思っそうですね。それは江戸時代生まれの人たちの一つの世代論ではあると思うんですけど、やっぱり今おっしゃったような商工業者が学校を作ったり市政にかかわったり、そうした動きと皇室が地域に入ってくるのがパラレルなんじゃないかなというイメージをもっています。

福家…時代と社会の担い手が変わっていくことで、崇拜の対象も置き換わっていったということですね。



高木氏



福家氏

高木…論集の「序論」でも触れましたが、檜山幸夫さんが『日清戦争』（講談社、一九九七年）のなかで書かれているように、広島藩の士族が日清戦争のとき、浅野家のために戦うというのはわかっていても国のために戦うことは実感できなかった、しかし大本営が広島にきた時に旧藩主・浅野長勲が明治天皇を臣下として出迎える姿をみて一気に実感する。そんな転換が日清戦争以後にありそうな気がするんですね。

■これからの歴史学と現代社会

田中…今回の研究会では、当初「顕彰」はキーワードというわけではありませんでした。結果的に大きくとりあげられましたね。**高木**…そうですね、ひとつは、研究会をやってみたら全体に顕彰論が多かったという、いまの研究動向があります。最近でも『武士の神格化』（高野信治著、吉川弘文館、二〇一七年）という本が出ていますけど、いま非常に関心が高い問題だと思います。それぞれの時代のなかでの歴史をどう捉えるかという問題意識であり、それは歴史の顕彰が政治とかかわっているということです。そして歴史の顕彰の核に皇室や天皇制の問題があったことが、近代日本のひとつの特色ではないでしょうか。

福家…高木さんの「序論」を拝見して思ったのは、顕彰に歴史学者がかかわっていた意味を考えなければならぬということです。史実を軽視した顕彰に、多くの歴史学者が加担してしまった。その結果自体も批判的に見直す必要があるのですが、加担したプロセスもちゃんと検証する必要があります。あわせて、そうした問題を、単なる歴史的な現象として片付けてしまおうのではなくて、現代において歴史学者はどうあるべきなのかということも考えなければいけないですね。それをこの本では強く訴えていて、そこが現在、ポストトゥルースではないですが、根拠が希薄な内容を政治家や言論人が平気で述べたりするなかで、歴史学者がどういう思想や倫理観をもって歴史を考えるのかということへの、ひとつの問いかけになっている。そういう意味ではすごく現代性があるなと、論集を読んで思いました。

高木…現代に引き継がれる課題でいえば、神話と史実の分離という問題があります。今回の論集は主に戦前期のことを書いていますが、これはたとえば社会科の改革であったり、墨塗り教科書であったりと、戦後改革時の問題でもあったと思うのです。戦前期の、国民道徳が史実や真正性よりも優先されるという状況から、神話と史実の分離という状況へと戦後変わってくるのですけれども、実際にはやはり天皇制というものは非合理的な部分も内包していますので、それにかかわる部分で戦後にも神話や道徳が残るところがある。とくに二一世紀でそういう問題が表面化してきています。直近の問題でいえば「仁徳天皇陵古墳」という一九世紀の学問によって決められた名称で世界遺産に申請した問題、それから桜

井駅を史蹟として日本遺産に登録しようとする動き。後者は楠木正成・正行父子訣別の地として顕彰されてきましたが、大正期に史跡指定にかかわった黒板勝美自身ですら、それは『太平記』で創作された物語に過ぎないといっています。戦後改革のなかで国指定史跡が解除されていなくて、戦前と同じように史跡となっているのです。天皇代替わりの際に行われる大嘗祭も、本居宣長の頃から昭和期を通じては、新しい天皇が瓊瓊杵尊として生まれかわるという神話的要素をもった儀式になっています。

天皇制研究に関していえば、天皇個人の行動や思想の評価も大切ですが、制度自体は血統に裏づけられており、生まれながらに貴種性をもつ制度ですので、つねに民主主義や国民主権という近代の理念との関係性を考え続ける必要があるだろうと思っています。田中…さきほどおっしゃった陵墓をめぐる動きというのは、地域で「仁徳天皇の古墳であってほしい」というローカルニーズがあって、一種神話的だったり物語的だったりするものが「史実」として練られていったと理解していいのですか。

高木…「仁徳天皇陵」は宮内庁が決めた名称でして、あえてこれを使って世界遺産に申請するというのは、一部の学者や文化庁による宮内庁への忖度です。被葬者が不明であることにくわえ、そもそも「天皇」という号そのものが五世紀にはないので、「仁徳天皇陵」という名称を多くの考古学者も歴史学者も、自身の研究のなかでは使いません。だから「大山古墳」等の学術用語を使っています。それが一般にはわかりづらいということであれば、両方を併記すれば良いと思うのですが、そうなっていない。

田中…私は物語の強さという問題を感じることがよくあります。たとえば一八八九年に第三高等中学校が京都におかれました。これは教育熱心な京都の知事と町衆が誘致した結果だという言説が根強くあります。私は史料に基づいてそうではないと結構主張しているつもりなんですけど、やっぱりその物語の力強さにはかなわないところがあって……。歴史学者がいろいろな実証と呼ばれる営みを通して見つけ出した事実を、どうしても社会と共有できるのか。「共有していらん」っていうのもひとつの立場だとは思いますが、うんですけれども、なかなか実証された史実が強い物語にはならないという実態はあるなと感じています。

福家…今回の論集では、直接的には天皇制と社会の関係を扱っているわけですけど、歴史や歴史学は現代社会においてどうあるべきなのか問われているのだと思います。さきほどの田中さんのお話ともかわると思いますが、この論集を読んでいて、「今後の歴史学ってどうあるべきなんだろう」というのを考えさせられました。

これまで影響力があった戦後歴史学は、「進歩」という概念を社会と共有してきたと思います。マルクス主義の影響も強かったし、書き手も読み手も経済成長で社会が進歩していくのがある程度実感できたと思うんです。けれども、そうした進歩の物語が次第に行き詰まってきたなかで、今後どういうものを歴史学者と社会が共有していけばいいのかということを改めて考えなければいけない時期にさしかかっているのだらうなと思います。

作品調査の魅力

かわだ まさゆき
河田昌之

今年の春、住古具慶^{すみこぐけい}という江戸時代の絵師が描いた屏風絵を所蔵するお寺に作品調査をお願いした時、「調査？」と怪訝そうな答えが返ってきた。「絵画を調査する」、それがどのようなことなのか具体的にイメージできるのは、作家や修復家はもちろん、絵画の研究者や学芸員など美術に関わる専門家を除いてほとんどないかもしれない。

絵をバラバラに解体して構造を分析すること、絵を描いた人物の素性を探偵のように調べること、その絵がどこにあるのか探すことなどいろいろな意見が出るかもしれない。解体するところまではいいかにしろ、当たらずとも遠からず。辞書的には「あることを明らかにするために調べる」のが調査なので、絵画の調査を説明するよう問われると、目的次第で多岐にわたり切りがない。

一般的には調査の対象となる実物を自分の目でじっくり観察する。その時に大きさ、状態が理解できるし、作品の持つ雰囲気にも気づくことさえある。これが熟覧である。そのほかに、採寸し特徴をメモする。添え状や書状、箱書きなどで作品の来歴を確認する。形状をスケッチする。許可が下りればスケッチはデジタル

カメラでの撮影に替わる。入手した時期など作品に関連する情報を所蔵者から伺えることもあり、作品について意見を交換することとは重要に思う。

このように書く調査は簡単そうに思えるかもしれないが、うまく行くとはい限らない。次にそんな体験を話そう。

ある老舗の古書店で、鎌倉時代の縁起絵巻の断簡が目録に掲載されていた。それは私が三〇年近く学芸員として勤務していた和泉市久保惣記念美術館が所蔵する作品の連れ、つまり元は同じ絵巻を構成していた一部分が伝来の途中で切り離されて別の絵巻に仕立てられたものであったので、詞と絵の場面や状態を確認したいと思った。調査が許可されたので店に入ると、二階の別室に通され、灰皿を中央に置くと他のスペースがなくなる五〇センチ程度の応接机上での閲覧であった。しかも私の前には店の幹部が六人ほど座ってこちらを見ているではないか。メモを取り撮影許可を請う状況になく、巻頭から巻末まで一通り目を通し、巻き戻した。そしてお礼を言って店を出た。作品調査は体験を重ねること、応接テーブル上であろうが、数人に見られていようが動じる

ことはなくなるが、当時、若輩学芸員であった私には苦いが良い体験になった。

学芸員の仕事には展覧会の企画と展示がある。その機会が多いほど、作品調査の体験が増すものだ。特別展図録の作品解説では、調査の時にどこをどのように観察したのかを細かく書く。それは私が勤めていた美術館の特別展図録の特徴でもあった。私は日本絵画史を専門にするので、絵師が作品のどこに力点を置いて制作したのか、作品の良さはどこにあるのかを観察に基づいて書いた。解説としては長文になるため、作品解説を一点書き終えると、調査時には得られなかった作品への愛着を感じる。特別展で扱った画人としての宮本武蔵とその作品「枯木鳴鶴図」や、学芸員として初めて研究に取り組んだ作品で五年前に重文に指定された土佐光吉が描いた「源氏物語手鑑」（いずれも和泉市久保惣記念美術館蔵）には、今でも関心は尽きない。細部まで観察して、それを自分の文章にすると、これまで誰も指摘しなかったことに言及できた、あるいはそんな気がするので作品や絵師に親近感が湧く。

海外での作品調査でも、その方法は変わらない。ニューヨーク公共図書館で三年前の作品調査時に、依頼したものと異なる作品が出され、先方の誤解を解くために四苦八苦したことがあった。そんな体験から今年三月の再調査時に恐る恐る閲覧室を訪ねると、以前と同じ司書の方が今度は笑顔で迎えてくれた。緊張がほぐれ、源氏物語「賢木」「栢木」冊子ほかの作品を気持ちよく調査できた。作品調査から生まれた作品に対する私の感情は、時に饒舌を促す。それは同じ三月、メトロポリタン美術館での作品調査時のハ

プニングである。やまと絵の調査を行っている場所に学芸員を訪ねて高名な日本文化研究者K先生が車椅子で現れたのである。予期せぬ訪問に驚いたのは私ばかりかその場にいた二人の学芸員でもある。私は名刺を出し挨拶して調査の目的を告げた。その場には土佐光吉の「源氏物語胡蝶図屏風」が広げられており、先生は興味深そうにその屏風をご覧になっておられた。その作品を観て考えを膨らませた私は、先生の側に行き、先生の目線に合わせて身を屈め、求められもしないのに唐突にも場面解説に及んでしまった。

先生はニコニコしながら私の説明を聞いておられた。二人の学芸員も側に立ち、腕組みしながら聞いていた。先生がその場を出られてから、源氏物語についての著書も多い先生に対して、私の稚拙な説明は出過ぎた行為だったかもしれないと反省した。しかし先生には申し訳なかったが、作品から受けた感銘を伝えたかったし、そうできて良かったと思っている。

作品があり、それを所蔵する美術館がある。そこでは作品を管理する学芸員や作品を取り扱う保存の専門家もいる。そしてアシスタントたちが関わって作品が伝えられていく。調査での作品との出会いはそれら関係者との出会いでもある。作品を巡って、調査する者とスタッフが会って意見交換する。それらのスタッフに支えられると調査がうまくいくことを経験から知った。そんな作品調査がますます好きになっている。

（大阪芸術大学教授／和泉市久保惣記念美術館館長）

農学者と風土

ど い ひろ つぐ
土井浩嗣

熊本で暮らしはじめて一〇年余りが過ぎた。大阪で生まれ育って三五年がたち、初めて西の九州に移り住んだ。熊本に来てまず実感したのは、陽射しの強さ、湿度の高さ、水の豊富さであり、植物が放つわきあがるような生命力であった。やがて日常の生活の中で地元の人々と接するにつれ、熊本の人たちの気質を知り、おぼろげながら伝統や文化も感じるようになった。熊本の風土の一端に触れた瞬間だった。

ところで、われわれがこの風土について考えるとき、哲学者・和辻哲郎（一八八九―一九六〇）の代表作『風土——人間学的考察』（一九三五年）を抜きに語ることにはできない。和辻は、京都帝国大学文学部に博士論文を提出した一九二七年に、文部省から三年間のドイツ留学を命じられ、最初で最後の海外生活を経験した。『風土』は、彼が神戸を出港して、上海、香港、シンガポール、コロンボを経由してアラビア海を越え、ヨーロッパへと向かった長い船旅から産み落とされた。この書の冒頭で和辻は、風土を「ある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称」と一旦提示しながら、思索の果てに「人間の自己了解の仕方」と定義する。

平たくいえば、風土とは、単なる自然科学的な現象ではなく、衣食住から芸術、宗教にいたるまであらゆる人間生活を根源的に規定するものということになろう。

さて、このたび筆者は『植民地朝鮮の勸農政策』を上梓した。この中に、日本人農学者の本田幸介（一八六四―一九三〇）が登場する。本田は、一九〇六―一九九年の間、朝鮮の京畿道・水原に設置された農事試験研究機関である勸業模範場の初代場長を務めた人物である。和辻よりも約二五歳年上で、より多くの海外生活・調査の経験をもっていた。ここで、本田が残したいくつかの報告記事を断片的だが紹介したい。

本田幸介は、帝国大学（現在の東京大学）農科大学助教教授就任後の一八九一年に畜産学研究の命を受け、ドイツで約四年半にわたる海外生活を送った。彼がどのような経路でヨーロッパへ渡ったのかは不明であるが、今日では想像がつかないような壮大な旅であったことは間違いない。和辻の場合は、この強烈な渡航経験を、モンズーン型（東アジア・南アジアなど）、砂漠型（西アジアなど）、牧場型（ヨーロッパ）の三類型からなる風土論にまであざやかな筆致で

昇華させた。一方、本田の場合、技術畑の農学者であったせいか、渡航や海外生活にまつわる文章を全く残していない。

次に、本田は、一九〇三年に農事調査のため清国・中国・韓国（朝鮮）に派遣された。まず清国では揚子江沿岸と「北支那」の調査を行い、清国の農業は非常に幼稚で粗雑であると結論づける。その原因として彼は、「清国は気候・土壌・災害など天然の要素で日本よりも恵まれているが、それに甘えすぎていること」、また「農民に対する教育が行われていないこと」の二点を指摘している（『支那視察雜感二』『中央農事報』四五号、一九〇三年二月）。続く韓国では、牛・馬や牛疫などの調査を実施した。特に彼は牛（朝鮮牛）に最も関心を示し、朝鮮では古来より労働用・食肉用の両方に利用され、日本や中国よりもはるかに優れていると評価している（『韓国の牧畜』『農事雜報』七三号、一九〇四年六月）。まもなく日露戦争が勃発すると、日本政府農商務省農務局により朝鮮全土にわたる「韓国土地農産調査」が実施され、本田は再度朝鮮北部地方の調査に当たった。これら二度にわたる調査経験は、勸業模範場の初代場長就任へとつながっていく。

併合後、朝鮮総督府は、一九一二年に米作・棉作・養蚕・畜牛の改良増殖に関する訓令を発し、農業政策を本格的に開始する。本田はこの時期、朝鮮の在来農法について、日本内地と比較すれば粗放で大農の傾向があるが、「世界各国の農業に比すれば寧ろ小農的にして却って日本内地の農業に類せり」と自らの見解を披露している（『朝鮮農業論』『大日本農會報』三六七号、一九一二年一月）。

ちなみに本田は、場長在任中、農業視察のため一九一六年九月

（一七年一月の約四ヶ月間アメリカに滞在している。彼は最初に訪問したカリフォルニア州について、今日では世界第一の農業生産地であるが、七〇年前までは草が枯れるほどの乾燥地で、半分は砂漠同然であったと説明する。そして、こうした不毛の地が農業地帯となったのは、灌漑の整備など乾燥地を克服する工夫が行われたからである。これに比べれば、日本人が朝鮮の暑さ寒さを嘆くことなどは実に恥ずべきことであると記している（『北米視察雜感』『朝鮮彙報』一九一七年六月）。

昨夏、拙著の執筆中に、かつての勸業模範場の地を約一〇年ぶりに訪れた。現在、そこには韓国政府農村振興庁の地方施設が置かれている。水原駅の西側は開発に取り残され、まっすぐにのびる道路や、豊かな水をたたえた西湖など、植民地時代を感じさせる風景が今も広がっている。本田幸介は朝鮮で約一四年余りを過ごしたが、熊本での筆者と同じく次第に朝鮮の風土を全身で感じようになったのではないだろうか。ヨーロッパ、中国、アメリカを知る彼が、たとえ和辻哲郎のようなみずみずしさはなくても、農学者として独自の風土論を秘めていた可能性は高い。文献資料で立証することは至難の業だが、植民地朝鮮の農業政策が世界的な視野から模索された側面について、大いに想像力を働かせつつ考えてみる必要があるだろう。

（熊本学園大学准教授）

植民地朝鮮の勸農政策

A5判上製・四四八頁／本体九、〇〇〇円

▼詳細30頁

「ムラの戸籍簿」を作る

はな だ たく し
花田卓司

「ムラの戸籍簿」という聞きなれない語に、戸惑った読者もおられるかもしれない。話は一三年前にさかのぼる。

二〇〇五年四月、立命館大学大学院の演習を担当していた大山喬平氏が「史料上「〇〇郷（村）」と明記される初見事例を拾い、近世村に名称が存続するものには「☆」マークをつけ、律令制下の国別・郡別で年代順に並べた表を作ろう」と提案した。演習の参加者は、それぞれの研究テーマや出身地に応じて担当国を決め、作業を開始した。私が選んだのは下野国である。卒業論文で鎌倉期の足利氏を取り上げたので、足利氏とゆかりの深い地域の史料を読んでみよう、というのが主な理由だったが、下野国ならば『栃木県史』史料編で郷や村の史料をあらかじめ拾えるだろうし、作業もやりやすいのではないか、という見通しもあった。

ところが、実際に作業に取りかかってみると予想以上に大変だった。『栃木県史』史料編の中世文書は、所蔵者別の配列となっている。したがって、『X家文書』で一五世紀の史料にあらわれる郷や村が、『Y家文書』では一四世紀の史料に登場する、また別の『Z家文書』をめくると、実は一三世紀の史料にすでに記載

されている……といったことがしばしばあった。結局のところ、すべての中世文書を目を通してからでなければ初見事例がどれかを確定できない。『栃木県史』を一枚一枚めぐりながら、郷名や村名が記されている史料に片っ端から付箋を貼り、エクセルに郷名・村名や年代を入力し、最後に年代順にソートするという作業を経て、やっと初見事例にたどり着くことができた。

苦勞して見出した初見事例を郡別に一覧表化する作業も難航した。下野国は「□□郡〇〇郷（村）」と表記される史料がほとんどなく、多くの郷や村は、荘園名や中世に用いられるようになった新たな郡の名称（研究史上、中世的郡・私郡・新郡などと呼称されるもの）を冠して表記される。しかも、荘園や新郡のなかには、明らかに律令制下の郡域をまたいだ領域をもつものもあったため、史料に記載された郷や村が、律令制下のいずれの郡域にある（と考えられる）郷・村なのか、『日本歴史地名大系』（平凡社）や『角川日本地名大辞典』（角川書店）、『市史』『町史』などをいちいち確認し、地図を見ながら、地道に推定していかなければならなかった。

そうした困難の末に、ようやく表ができがりつつあった頃、

大山氏の立命館大学退職にもなつて演習も終わることになってしまった。しかし、表作りが中途半端になるのはもったいないという思いから、谷昇氏・三枝暁子氏と相談して、二〇〇九年四月「ムラの戸籍簿」研究会を発足させて作業を継続することになった。これももう、一〇年も前の話である。研究会の名称の由来は、大山氏が第一回地域史惣寄合（二〇〇八年五月）の基調講演において、郷と村の初見事例を集めた表を、人間の出生から死亡までを記録する戸籍になぞらえて「郷と村の戸籍簿」と呼んでいたのに由来する。

研究会は、全六八カ国の「ムラの戸籍簿」の完成をめざすとともに、「ムラの戸籍簿」を作成する過程で出会う、郷・村の実態をよく物語る史料の分析、地域（国・郡）ごとの特徴の考察に重きを置いて活動してきた。「ムラの戸籍簿」を作るだけならば、公開されている各種データベースを使えばそれほど難しい作業ではない。あるいは、『日本歴史地名大系』や『角川日本地名大辞典』をめくって郷・村を収集するという方法もあり得るだろう（JapanknowledgeやCD-ROMを利用すれば、驚くほど簡単に検索することもできる）。しかし、研究会では敢えてそうした方法を探らず、『県史』などの史料集を「めくる」ことにこだわった。なぜならば、研究会の真の目的が、一つの地域の古代・中世史料を通覧し、地域の歴史の具体像を体得すること、その上で郷・村の実態を分析することにあつたからである。「ムラの戸籍簿」は、あくまでも本格的な考察のための手がかりという位置づけなのである。

このたび刊行する大山喬平・三枝暁子編『古代・中世の地域社

会——「ムラの戸籍簿」の可能性——」は、このような約一〇年におよぶ研究会活動のなから生まれた研究会メンバーの論文、シンポジウムや二〇一四年に採択された科学研究費補助金など、さまざまなかたちで研究会に協力していただいている方々の論文を収録している。また、本書の刊行とともに、現時点でデータとして集積されている国々の「ムラの戸籍簿」をウェブ上で公開する<https://dft.hip.mura/>ので、こちらもあわせてご覧いただければ幸いである。

古代以来、人びとの生活の基盤として存在し続けてきたムラは、ここ数十年の間に急速に消滅している。そしてそれは、ムラに暮らしていた人びとが、長い時間をかけて築き上げてきた歴史や文化の消滅と表裏の関係にある。必ずしも村落史研究を専門としているわけではない研究会メンバーが、「ムラの戸籍簿」を作り、ムラの歴史的位置を探ろうとしている背景には、失われつつあるものへの危機意識・問題意識がある。本書の刊行をきっかけに、「ムラの戸籍簿」作りの輪が広がっていくことを期待している。

（帝塚山大学講師）

古代・中世の地域社会 「ムラの戸籍簿」の可能性

〈執筆者〉 山内謙・小林昌二・鎌倉佐保・木村茂光・村上絢一・川端泰幸・花田卓司・三枝暁子・吉永隆記・谷昇・門井慶介・服部光真・伊藤哲平・松井直人・上川通夫・春田直紀・山本隆志・海老澤袁・大山喬平（あとがき）……収録順

A5 判上製・五四四頁／本体 九、〇〇〇円

▼詳細 25 頁

余は如何いかにして

倉本一宏くらもと かずひろ

『御堂関白記』研究者となりし乎か

早いもので、藤原道長の日記『御堂関白記』を読み始めてから、今年の十月でちょうど四十年になった。人生のちょうど三分の二を『御堂関白記』と過ごしてきたことになる。

一九七八年四月に何とか大学に入學した時には、日本中世史を学ぼうと思っていた。ところが、ゼミナル形式の小人数講義（教養ゼミ）で中世史の義江彰夫先生のゼミ（『平家物語』）に入ろうと教室に行ったら、学生でいっぱいに入れなかった。次に古代史の笹山晴生先生のゼミ（『日本書紀』天武紀）に行くと、まだ空席があったので、そのまま受講することにした。中世史を学ぶには、まず古代史を学ぶのがいいだろうと考えて古代史から入ったのであるが、いまだに平安時代から先に進んでいない。

半年を経た一九七八年十月、同じクラスの柳澤賢一君から、前期は山中裕先生のゼミ（『栄花物語』）に出ていたが、自分は進む道が違うから、君が代わりに出てはどうかと提案され、『栄花物語全註釈』（角川書店）を譲ってくれた。こうして遅れること半年にして、私と平安時代との関わりが始まったのである。今でも私の『栄花物語全註釈』には柳澤君の名前が書いてある。なお、柳澤君は無

事に堅気の世界に進んで教育学部に進学し、茨城県庁を経て、現在は国際交流基金の幹部となっている。昨年、四谷の交流基金のパーティーに呼ばれ、出席してみたら、柳澤君と三十九年ぶりに再会し、大いに旧交を温めたものである。

さて、『栄花物語』ゼミは、教養ゼミとは名ばかりで、国文や国史の大学院の先輩たちが何人も参加され、『御堂関白記』や『小右記』を縦横無尽に読んで議論し合うという、一年生にとつてはとんでもない場であった。ゼミが終わると渋谷で呑むことが多く、随分と可愛がられた。後年、「あれに耐えられた人だけ、学界に残ったんだねえ」と、仲間と語り合ったものである。

「こんなのも読めんのか」と怒られても、「こんなん読むん初めてやし」という感じだったし、「せめて俺の半分くらいは日記を読めるようになってみる」と訓じられて、せめて半分くらい読めるようになろうと心に決めた。なお、その先輩には、随分経ってから、「半分くらいは読めるようになりました」と、思わずいけずを言ってしまった。

翌一九七九年の一月には、いきなり巻第八「はつはな」の冒頭、

藤原頼通の春日祭勅使の箇所の発表が回ってきた。必然的に『御堂関白記』長保六年（寛弘元年、一〇〇四）二月の、藤原公任や花山院との和歌のやりとりに関わる部分を読むことになった。発表はぼろかすに批判されたが、それを基に二月に書いたレポート「藤原頼通の春日祭勅使」が、私のはじめての『御堂関白記』に関する文章ということになる。なお、このレポートは、その後、『歴史物語と古記録1 御堂関白記—藤原頼通の春日祭勅使をめぐる—』と改題して歴史物語講座刊行委員会編『歴史物語講座第7巻 時代と文化』（風間書房、一九九八年）に載せてもらい、「藤原頼通の春日祭勅使をめぐる—歴史物語と古記録の間—」と再改題して拙著『撰関政治と王朝貴族』（吉川弘文館、二〇〇〇年）に再収した。教養ゼミの一年時のレポートを論文集に載せるなど、ほとんど詐偽みたいなものである。

先輩たちに連れられて、真夏（最終日が五山の送り火）に平安博物館で行なわれていた『御堂関白記』の集中講義にも参加したが、それはさらにとんでもない場であった。寒がりの山中先生を慮って、部屋の冷房は止められていたのである。自動車で行った際に先生をお乗せした時などは、クーラーはもちろん、窓を開けても寒がられるので、走るサウナのような状態であった。しかも、午前中は集中講義、昼食はイノダコーヒ本店のランチ（コッペパンとサラダ）、午後は翌日の予習会、夕食は河原町三条にあった不二家（ドリアかスバゲッテイ）という生活で、「せっかく京都に来てるのに」といつも思ったものである。不二家が撤退した時には、（不二家は申し訳ないのだが）心の中で快哉を叫んだものである。

しかしながら、先輩たちが暑い部屋で『御堂関白記』の発表をされ、熱い議論をされているのを聞きながら、自分もいつかはここで『御堂関白記』の発表を行ない、『古代文化』に『御堂関白記』の註釈を載せるようになってみたいと夢見ていたのも事実である。今でも三条辺りを通ると、いつもあの頃のことを思い出し、ほろ苦い気分になる。あの時の熱情は、はたして今でも残っているのであろうかと。

今回、『御堂関白記』の原稿を集めて、一冊の本にしていたのだが、あの京都の暑い夏を思い出しながら、この本をきっかけにして、また新たなスタートを切ってみたい。残された時間は少ないのかもしれないが、「今なら間に合うかもしれない」という楽観的な希望（それはこの四十年、いや六十年の間、私を支えてきた根本的な心情である）を唯一の頼みとして、新たな勉強を始めてみたいと考える今日この頃である。

なお、これもまったくの偶然であるが、今年の旧暦十月十六日は、道長が「この世をば」の歌を詠んでから、ちょうど千年になる。現代の暦では、二〇一八年十一月二十五日にあたるが、満月という、二十二日の月齢が一四・五、二十三日の月齢が一五・五である。月齢というのは正午時点での満ち欠けで計算するので、二十二日から二十三日に替わる直前に月齢一五・〇を迎えることになる。二十二日の月の南中は二三時一四分である。その時刻に南の空を見上げて、小さな声で、「この世をば」と口ずさんでみてはいかがであろう。

美術史研究の情報共有

江村知子
むら とも こ
(東京文化財研究所)

日常生活において、最近では便利になったな、と思うことが多い。交通機関の情報は常にリアルタイムで確認でき、位置情報サービスで初めて訪れる場所にも迷わず到達でき、言語の全くわからない異国に一人で行っても評判のよいレストランを検索して食事を楽しむことができる。研究においても、情報技術発達の恩恵を受けることが多い。インターネット検索で先行研究や関連資料について下調べができて、文献や作品の所蔵先にわざわざ足を運ばなくてもかなりの情報がいつでもどこでも入手できる。社会と技術の変化のスピードは恐ろしいほど速く、自分はただ流されて老化していくだけのようにも思われる。「二〇三〇年」と検索すると、日本の人口の三割が六十五歳以上の超高齢化社会、人口減少と労働力不足がもたらす様々な問題が深刻化、などという情報が洪水のように表示される。どのような対策を取っても全面的な解決は不可能であるように見える。しかしこれは変化し続ける社会の必然の行く末で、良いも悪いもなく、受け入れて適応していくしかないようにも思われる。

二〇三〇年にはさらに便利な世の中になっているのか、もはや想像もできないが、現在私が所属している東京文化財研究所が行

っている様々な事業の中には、将来的な利用価値の拡大や発展性が見込めるものがある。一例として、当研究所では二〇一六年にアメリカのゲッティ研究所と日本美術の共同研究に関する協定を結び、翌年五月には、ゲッティ・リサーチ・ポータルに当研究所文化財情報部資料閲覧室所蔵の『みづる』など明治期の貴重資料九〇件のデジタルデータを提供した。ゲッティ・リサーチ・ポータルはバーチャル美術図書館として、図書館・美術館・研究機関などが所蔵する貴重書などを横断検索し、閲覧利用できるポータルサイトである。現在、欧米・南米・日本の三十四の機関から提供された一二万点余りのタイトルのデジタルデータをダウンロード可能な形で閲覧することができる。このポータルサイトは西洋美術史などの分野ではよく知られ、利用されているが、アジアからの情報提供機関としては当研究所が初めての参加となった。

現在は、ゲッティ財団からの助成金を得て、当研究所所蔵の明治大正期のカタログなどのデジタル化を進めており、このポータルサイトに提供するデータを増やしていく予定である。データ自体は当研究所のウェブサイトに置き、横断検索を可能にするためのメタ・データの整備などが必須条件となっているが、一度そ

のルールに則って作られたデータは、いろいろな形で再利用できる。貴重書として保存のために閲覧を制限してひっそりと書庫に保管されていた資料でも、デジタル化され、ポータルサイトに搭載されると、そのデータが公共財となつて、いつでもどこでも誰でも利用可能になる。このサイトの運営プロジェクトは二〇一二年に開始され、二〇三〇年には同じ形式ではないかもしれないが、より広く、より多くのものが利用可能になっていることは想像に難くない。世界中で様々なレベルで行われている「知の共有」は留まるところを知らず、情報は溢れていく。すると数量の多いものの中から本当に自分の必要なものを探し、選ぶことがますます重要視されるだろう。選ぶためには評価することが必要となる。評価をするためには、より多くのものを見て比較して、その個別の対象物と全体を理解することが求められる。

こうしたデジタルの時代にあつて、当研究所では元祖アナログの資料を数多く所蔵している。古写本、写真、手書きの資料、枚挙に暇がないが、ここ十年ほど私が関わっているものに「田中一松資料」がある。田中一松（いちまつ）（一八九五～一九八三）は一九五三年から十二年間ほど当研究所の所長を務めた人物で、一九二三年の東京帝国大学卒業以来、生涯文化財行政の中枢にいた。この資料にはノート約四〇冊、作品調書約一万二千件、写真、会議資料などが含まれ、二〇〇八年にご遺族および出光美術館より寄贈された。田中の作品調書は「昭和の古画備考」と称され、作品の持つ情報を文字とスケッチで余すところなく写し取るところに最大の特徴がある。田中は幼少期から書画に優れ、山形県鶴岡市の庄内小・

中学校時代の見事な画帖やスケッチブックなども現存しており、絵が得意だったことがわかるが、作品調書にスケッチを描いていたのは、写真が手軽に撮れなかった時代に、作品を特定し、作品の特質を明確に把握し、評価するための記録として、整理・活用していたためと想像される。例えば「雪舟筆山水図」という文字情報だけでは作品が特定できないが、図様・落款印章・賛などの情報により、その作品についてより詳細に知ることができる。膨大な作品調書からは、田中がその業務や研究において、作品の要素をどのように情報化していたのか、その足跡をたどることができる。また作家にまつわる史料を抜きにしてまとめ、実績がわかる作家については年表を作り、作品を位置付ける。そうしたお手製の年表だけでも一二〇点以上がある。一九三〇年頃よりノート形式から分類に便利な原稿用紙や便箋を用いるようになったのは、分類の利便性のためと想像される。田中の営みは、まさに文化財アーカイブの構築でもあった。

今年五／八月に実践女子大学雪香記念資料館と京都工芸繊維大学において、「記録された日本美術史―相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」が行われ、田中資料を初めて公開した。ありがたい反響も多く頂き、今後ますます整理・公開していく必要があることを痛感した。二〇三〇年には折しも当研究所は創立百周年を迎える。その時までにはこうした調査ノートを可能な範囲で公共財にしたい。そしてその頃には、とある国宝絵画の前で鑑賞者が「一松先生、教えて」とつぶやくと、調査ノートの内容の解説を携帯端末で聴けるようになっていくかもしれない。

能の絵画化

—「〔絵入謡本〕」あふひの上(葵上)」の挿絵をめぐって—

長田あかね

(神戸女子大学古典芸能研究センター非常勤研究員)

神戸女子大学古典芸能研究センター(以下、センター)は、平成十三年(二〇〇二)の設立以来、中世芸能(能・狂言)、近世芸能(浄瑠璃・歌舞伎)、民俗芸能の三分野を柱にして、日本の古典芸能を幅広い視野から総合的に調査・分析してきた研究施設である。これまでの研究成果は、刊行物、データベース、講座、シンポジウムなど、さまざまな形で発信し、社会への学的貢献を行ってきた。センターが所蔵する資料も多岐に渡り、中世芸能資料の橋文庫(大阪能楽観賞会事務局長故橋豊秋氏旧蔵)および伊藤正義文庫(初代センター長故伊藤正義氏旧蔵)、近世芸能の志水文庫(本学名誉教授信多純一氏旧蔵)、民俗芸能資料の喜多文庫(民俗芸能研究家故喜多慶治氏調査資料)など、古典芸能や民俗芸能に関する資料を幅広く備えている。これらの資料のうち、今回は能の絵画資料として貴重な「〔絵入謡本〕」(以下、神女大本)を紹介したい。

神女大本は、全十二帖の彩色写本。いずれも列帖装の半紙本で、表紙は金泥霞引草木模様の紺色紙に金の砂子・切箔が蒔かれ

る。左肩に曲名を墨書した縦長題簽が貼付され、内題はない。観世流の詞書(詞章)が鳥の子紙に原則片面七行で書かれる。書体は全帖一筆とみられ、題簽と同筆である。本文の右肩に役名表記があり、「詞・カ・ル・一セイ」などの節付け記号が付されるが、ゴマ点はない。一帖一曲を収め、所収曲は「養老・道盛・きよつね・三輪・松風・あこき・あふひの上・盛久・ありとをし・邯鄲・橋弁慶・殺生石」の全十二曲となる。各帖に一図から四図の挿絵が載るが、もとは一帖あたり四図(橋弁慶)のみ三図の挿絵が施されていたとみられ、全帖で十一箇所の絵が抜かれている。木箱の蓋裏に「大正十三甲子七月十日/前田家於本郷邸内御弘道具ノ/節求之」の墨書があり、もとは前田侯爵家旧蔵だったものが大正十三年に売り立てられたことが知られる。

能の物語を絵画化して鑑賞するという現象は、室町後期頃から流行した文芸作品の絵入本化の一環として広まったとされる。奈良絵本に分類されるそれら能の絵本・絵巻は、国内・海外をあわ

せて、これまでに約二十点に及ぶ伝存が知られており、そのほとんどが謡曲の詞章そのままの詞書と挿絵の組み合わせでできている。決して多いとは言えない残存状況であるが、神女大本と同じ元は揃い本だったと推測される豪華本は特に稀少で、東洋文庫（岩崎文庫）蔵「観世流謡本絵入六番」六冊など三種類しか知られていない。これらの絵入謡本の成立時期は江戸前期頃と考えられて

『絵入謡本』『あふひの上』第二図目の挿絵

（神戸女子大学古典芸能研究センター蔵）



おり、神女大本も概ねこの頃に制作されたと推測される。神女大本の挿絵は、いわゆる奈良絵風の彩色絵で、決して端正な画風ではない。しかし、単なる能の物語の視覚化という範疇には収まりきらない、興味深い描写がまま見受けられる。ここでは「あふひの上（葵上）」の挿絵の一つを取りあげ、能の絵画化の一例に迫ってみたい。

《葵上》は『源氏物語』に基づく能で、光源氏の正妻葵上に取り憑いた六条御息所の生霊が、横川の小型の祈禱によって成仏するというストーリーである。神女大本「葵上」には三図の挿絵が残っており、そのうち二図目（図版）は能の前場において、六条御息所の生霊（前シテ、右から三人目）が梓巫女である照日の巫女（ツレ、最左）に呼び出され、姿を現わした場面を捉えたものである。能の舞台では大がかりなセットを使用しないため、観客が想像するしかない室内の様子を（正確な時代考証はさておき）具体的に描くほか、照日の巫女は能装束（岡家本江戸初期能型付）によると、首から下の装束は小袖・白水衣（舞衣でも）・扇で現行とほぼ同じ）とは大きく異なる平安朝風の衣服を身にまとい、能では演じられない梓弓を用いた口寄せを行っている。これらの描写は実際の能の演出とは異なるものであり、能《葵上》の物語の内容を具象化するため、平安朝の風俗や梓巫女の呪術に関する知識に基づき、絵師が想像して描いたものであろう。

一方で、この挿絵には、純粹な物語の絵画化とは異なる要素も含まれている。それは照日の巫女の真下に位置する葵上の描写である。実際の能の舞台では葵上を生身の役者が演じることではなく、

舞台先に置いた小袖によって葵上が病床に伏している状態を表現する、「出小袖」というユニークな方法が取られている。挿絵では、寝台らしき黒塗りの台の上に、折り畳まれた薄模様の入りの白地の衣（夜具か）が置かれているが、これが葵上を表すことは疑いの余地がない。実際の出小袖は縫箔などの派手な小袖類を縦に二つ折りにして舞台上に直接置くため挿絵とは異なる点も多いが、生身の葵上を登場させずに、その存在を示そうとする方法は同じである。挿絵の葵上の描写には、能の特殊な演出が取り入れられたと考えるべきであろう。

さらに、もう一点注目すべきは、挿絵の最右で縁側に控えている侍烏帽子に直垂姿の従者らしき人物の存在である。実は、天正頃の観世流謡本によると、能《葵上》には、前場に朱雀院の廷臣（ワキツレ、右から二人目）の従者（アイ）が登場し、照日の巫女を呼び出すという演出が存在した。江戸初期にはこの演出は見えなくなり、神女大本「葵上」の前場の詞書（詞章）からも従者（アイ）の登場を確認することはできない。絵師が詞書（詞章）に記されない従者を一から想像して描いたとは考えがたく、この従者の描写には古い間狂言の演出が取り入れられた可能性が高い。先の葵上の描写と合わせて、神女大本の絵師は、能に関する知識を、ある程度知り得ることのできた人物だったのだろう。

以上の如く、神女大本「葵上」の挿絵は、物語絵をベースにしながらも、所々に実際の能の演出を反映させた描写を組み合わせたという、一見アンバランスな構成でできている。しかし、舞台のエッセンスを取り込みつつ、能の物語を視覚的に把握できる読

み物として優れた内容を持つと思われる、今後の研究の進展が期待される。

神女大本は、センターおよび本学図書館が所蔵する、他の能・狂言の絵画資料とあわせて、今秋に『絵入謡本と能狂言絵』（神戸女子大学古典芸能研究センター研究資料集②）として思文閣出版から刊行予定である。また、資料集に収録する絵画資料を中心とした企画展も、センター展示室において、九月十八日（火）から十月三十一日（水）まで開催している。是非、お立ち寄りいただきたい。

神戸女子大学古典芸能研究センター

【所在地】

〒650-0004 兵庫県神戸市中央区中山手通2丁目23-1
神戸女子大学教育センター2階
TEL:078-231-1061 FAX:078-231-1211
E-mail:geinou@suma.kobe-wu.ac
ホームページ:http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/

【交通アクセス】

■JR神戸線[三ノ宮]／阪急神戸線・阪神本線[神戸三宮]／神戸市営地下鉄西神・山手線[三宮]／神戸新交通（ポートライナー）[三宮]下車、北へ徒歩約15分

【開館時間】

月～金曜日 午前10時～午後5時

【休館日】

土曜日／日曜日／祝日／大学記念日その他臨時閉室期間
＊ホームページ「開室カレンダー」参照

【催しの予定】

企画展「能・狂言絵の世界」
期間:2018年9月18日（火）～10月31日（水）

第50回コスモス祭参加「能・狂言絵の世界」＊上記企画展から一部を展示
期間:2018年11月3日（土）・11月4日（日）

場所:神戸女子大学須磨キャンパス A402・A403
11月4日（日）13:00～16:00、A408にて関連講演会開催
講師:樹下 文隆（文学部日本語日本文学科教授）
ギャラリートーク:長田 あかね

▼話題の映画「カメラを止めるな!」を見てきました。少しでも感想を語ると、それ自体がネタバレになるという、前代未聞の映画。見ていない人はぜひとも映画館で見てほしいです。注目ポイントはほとんど無名の監督と役者での異例のヒットかたや出版業界でも、ほとんど知られていなかった既刊書が書店員の力によって大ヒットに結び付いた「文庫X」のように、売り方次第では、大ヒットにつながる方法がまだまだ眠っているかもしれません。日々の何気ないヒントを見逃さず、日々精進していきます。

(一)

☆学会出店情報

小社刊行図書を展示販売

※日付は小社の出店予定日

日本史研究会(佛教大)	10/13(土)・14(日)
日本民俗学会(駒澤大)	10/13(土)・14(日)
日本思想史学会(神戸大)	10/13(土)・14(日)
中古文学会(ノートルダム清心女子大)	10/20(土)・21(日)
人文地理学会(奈良大)	11/24(土)・25(日)
史学会(東京大)	11/24(土)・25(日)

編集後記

▼音声入力でいたいむの文字起こしを試みたところ、天皇制の話をしたはずが生パスタの話になっていました。予測変換ってすごい。

(m)

▼京都府立京都学・歴史館で学術書の出版について講演しました。慣れないことで準備に苦労しましたが仕事を振り返るよい機会になりました。

(M)

▼地震、大雨、酷暑、台風と、読者の皆様におかれましては、お見舞い申し上げます。無事であることの有り難さをあらためて実感します。

(大)

▼83年生の妹。「四捨五入したら40歳だ」と自身の年に絶望しながら、ディズニー開業35周年は嬉嬉として祝う矛盾。これがミッキーの魔法か。

(理)

▼今年の甲子園も熱く感動した!!来年からは選手全員21世紀生まれになるのかと思うと時の流れの早さに涙

(き)

▼表紙図版:『(絵入謡本)』(神戸女子大学古典芸能研究センター所蔵)「邯鄲」より

『(絵入謡本と能狂言絵)より』

■定期購読のご案内

『鴨東通信』は年2回(春・秋)刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信 No.107

2018(平成30)年10月10日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/

表紙デザイン

HON DESIGN

倉本二宏（国際日本文化研究センター教授）著

『御堂関白記』の研究

10月刊行予定

A5判上製・三八四頁／予価 八、〇〇〇円

藤原道長の日記『御堂関白記』について、長年、先駆的な研究を深めてきた著者による、論文（新作を含む）からエッセイまでを蒐めたアンソロジー。撰関期古記録における『御堂関白記』、特に自筆本と古写本の特徴を抽出し、その座標を確立することにより、『御堂関白記』研究のみならず、古記録研究そのものの、また撰関政治論や王朝文化論に資する。

山中裕編

御堂関白記全註釈「全16冊」

A5判上製函入・平均二五〇頁／揃本体一〇七、〇〇〇円（分売可）



平安時代を代表する一級史料、藤原道長の日記「御堂関白記」の原文・読み下しと詳細な註により構成するシリーズ全16冊。入手困難な第1期（国書刊行会・高科書店発行）の全8冊を復刊。
御堂関白記抄／長徳4年・長保2年・寛弘元年・寛弘2年・寛弘3年・寛弘4年・寛弘5年・寛弘6年【改訂版】・寛弘7年・寛弘8年・長和元年・長和2年・長和4年・長和5年・寛仁元年・寛仁2年上・寛仁2年下／治安元年

序論 藤原道長と『御堂関白記』

一 自筆本『御堂関白記』をめぐる

1. 『御堂関白記』の裏書
2. 『御堂関白記』自筆本の文字の抹消について
3. 『御堂関白記』自筆本寛弘五年秋冬巻の裏に写された「後深心院関白記」抜書

二 『御堂関白記』の書写

1. 『御堂関白記』古写本の書写
2. 『御堂関白記』の仮名
3. 『御堂関白記』古写本・寛仁元年九月卅日条と十月一日条の書写順序をめぐって
4. 平松本『御堂関白記』と『御堂御記抄』

三 『御堂関白記』の内容

四 『御堂関白記』雑感

1. 「内府悦氣有り」
2. 寛弘五年七月の彰子土御門第退下をめぐる
3. 『御堂関白記』に見える「女方」
4. 『御堂関白記』の「妻」と「妾」について
1. 『御堂関白記』全現代語訳を終えて
2. 『御堂関白』藤原道長の実像
3. 『御堂関白記』は何故にすごいのか
平安時代理解のあたらしい地平へ
—古記録の現代語訳は何故に必要か—
5. 『御堂関白記』の世界記憶遺産（世界の記憶）登録について
6. 『御堂関白記』利用の変遷と「撰関期古記録データベース」

大津透（東京大学教授）

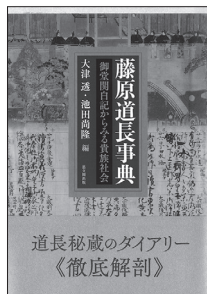
池田尚隆（山梨大学教授 編

藤原道長事典

御堂関白記からみる貴族社会―

【好評増刷】

A5判上製・四六二頁／本体六、〇〇〇円



藤原道長の日記『御堂関白記』に頻出の語句をとりあげ、11の大分類に整理。各ブロック冒頭には、専門の執筆者による詳細な解説を収録。『御堂関白記全註釈』（全16冊）を通して、最新の研究成果に基づいた新たな平安期の貴族社会像を提示する。

「京都の御大礼」展実行委員会編集・発行
所功（京都産業大学名誉教授 監修

京都の御大礼

即位礼・大嘗祭と宮廷文化のみやび―

9月刊行

A4判並製・二六八頁／本体五、五〇〇円



細見美術館「明治150年・平成30年記念 京都の御大礼―即位礼・大嘗祭と宮廷文化のみやび」の展覧会図録。

【目次】即位式図屏風と行幸図屏風／近世の即位式・近代の即位式／近世近代の大嘗祭／即位式・大嘗会の調度と悠紀主基屏風／大正・昭和の御大礼にみる奉祝／近代京都の発展と御大礼／悠紀主基斎田の人々

皇學館大学神道研究所編

訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀

『儀式』―「踐祚大嘗祭儀上・中・下」の訓読・注釈研究の成果

本体一五、〇〇〇円

中野渡俊治著

古代太上天皇の研究

奈良〜平安時代における太上天皇の地位の歴史の変遷を解明

本体五、四〇〇円

臈谷寿著

平安王朝の葬送―死・入棺・埋骨―

摂関院政期の天皇・貴族の葬送儀礼を通覧し、皇権の在り方を考察

本体三、七〇〇円

山中裕著

栄花物語・大鏡の研究

両書に内包される歴史書としての特徴や歴史的意義について論究

本体七、二〇〇円

法隆寺編

法隆寺史 上―古代・中世―

〔執筆者〕

森郁夫
岩本次郎
東野治之
渡辺晃宏
綾村宏
久野修義
梶谷亮治

4月刊行

A5判・五二〇頁／本体六、八〇〇円

日本最初の世界文化遺産である法隆寺の
1400年におよぶ歴史を通観する初の寺史



特色

■法要、組織、美術、建築、経済などを総合することで、それらを支えた各時代の信仰の姿を浮き彫りにし、日本仏教の始源から現代までをたどることができ

■所蔵の数万点におよぶ膨大な文書・記録を整理し、一般に知られた古代の姿のみならず、中世から戦後にいたる法隆寺の姿をも新史実を盛り込んで明らかにする

■固有名詞・難字などにはふりがなを付し、引用史料は原則として読み下しとするなど、法隆寺の歴史を広く社会的な共有財産とすることをめざした
■適宜挿入図版を収め各巻に索引を付す

■巻頭にカラー口絵16ページを収録
■全3巻構成。中巻（近世）は二〇一九年刊・下巻（近代）の刊行時期は未定

上巻 目次

- 序章 斑鳩の地理的環境と歴史的環境
- 第1章 聖徳太子と斑鳩宮
- 第2章 法隆寺の創建
- 第3章 西院伽藍と東院伽藍
- 第4章 聖徳太子信仰と子院の成立
- 第5章 南都の興隆と法隆寺
- 第6章 法隆寺の「寺中」と「寺辺」
- 第7章 法隆寺の中世的世界

大山喬平（京都大学名誉教授）

三枝暁子（東京大学准教授）編

古代・中世の地域社会

―「ムラの戸籍簿」の可能性

9月刊行

A5判上製・五四四頁／本体 九、〇〇〇円

古来より人びとの生活の基盤であった郷・村（ムラ）は、いつ生まれ、近世村にどのように接続するののか、あるいは消滅するののか。

政治史や社会経済史、宗教史、都市史などさまざまな専門分野を持つ研究者20名が、日本全国のムラの成立過程や、地域別のムラの特徴について分析の深化を試みる。

大山喬平氏のもとで結成された「ムラの戸籍簿」研究会、10年間におよぶ活動の集大成。村落史研究の新たな地平を拓く。

坂江渉著

日本古代国家の農民規範と地域社会

古代の農民像、律令国家の社会統治原理を明らかにする

本体 九、〇〇〇円

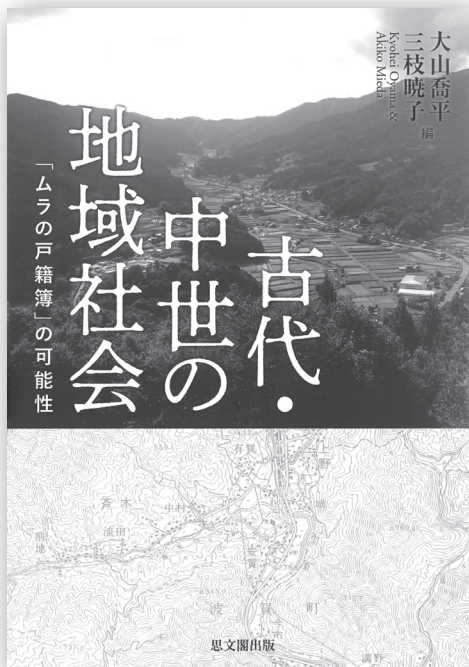
橋本道範著

日本中世の環境と村落

自然環境と人間との関係性を議論の中心に据えた村落論

本体 八、四〇〇円

大山喬平
三枝暁子
編
Kohei Oyamada &
Akiko Mieda



大山喬平編

中世荘園の世界―東寺領丹波国大山荘―

5年間の大山荘の調査結果をもとに中世荘園の全貌に迫る

本体 九、六〇〇円

川端新著

荘園制成立史の研究（オンデマンド版）

荘園制の成立過程やその構造的特質を問う著者遺稿集

本体 一〇、六〇〇円

京都府立京都学・歴史館編

東寺百合文書(十三)

リ函二・ヌ函一

9月刊行

A5判上製函入・四六二頁／本体 一三、五〇〇円

伊藤俊一（名城大学教授）

富田正弘（富山大学名誉教授）

本多俊彦（金沢学院大学准教授）編

東寺廿一口供僧方

評定引付 第3巻

A5判上製函入・三三八頁／本体 六、五〇〇円

上島有・大山喬平・黒川直則編

東寺百合文書を読む―よみがえる日本の中世―

東寺百合文書の中から50点を選び、魅力の一端を紹介する

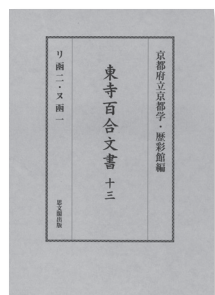
本体 二、五〇〇円

上島有著

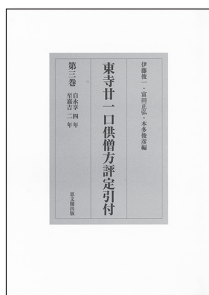
中世アーカイブズ学序説

中世・近世にまたがる個別文書群について論究

本体 一三、〇〇〇円



東寺に襲蔵されてきた、奈良時代から江戸時代初期までの総数一八、〇〇〇点・二七、〇〇〇通におよぶ日本最大の古文書群である東寺百合文書。「ひらかな之部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カナカナ之部」を翻刻。



「東寺百合文書」のなかに含まれる「東寺廿一口供僧方評定引付」を編年順に編集・翻刻し、校定・注釈（とくに関連文書の注記）を加える。

東寺の宗教活動や荘園経営の実態、商業活動や庶民生活など、室町・戦国期の政治・経済・社会・文化を伝える超一級の資料。

東寺文書研究会編

東寺文書と中世の諸相

東寺文書研究会による最新の研究成果19篇

本体 一、〇〇〇円

早島大祐編

西山地蔵院文書〔京都大学史料叢書6〕

室町期社会経済史上の重要な史料を影印・翻刻

本体 一三、〇〇〇円

松園 齊（愛知学院大学教授）著

中世禁裏女房の研究

10月刊行予定

A5判上製・五三四頁／本体 八、〇〇〇円

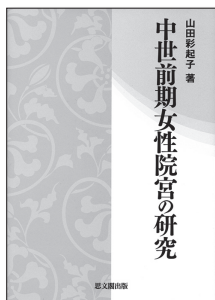
時代の目撃者であるにもかかわらず、必ずしも十分な研究がなされてきたとはいえない禁裏の女房たち。その実態に迫るべく、様々な文献史料を渉獵し、丹念に繋ぎ合わせることで、一人ひとりの動静と、彼女らが果たしてきた役割を明らかにしようとする意欲作。

山田彩起子 著

中世前期 女性院宮の研究

院政・鎌倉期における女性院宮（女院・后）の多様な存在形態を分析

本体 五、六〇〇円



鈴木則子 編

歴史における周縁と共生―女性・穢れ・衛生―

女性の周縁化（地位の劣化）が進行する過程を身体に着目し論考する

本体 六、八〇〇円

武田佐知子 編

交錯する知―衣装・信仰・女性―

衣装・信仰・女性などをテーマに31名による最新の研究成果

本体 二、〇〇〇円

佐藤宗諱先生退官記念論文集刊行会 編

『親信卿記』の研究

蔵人の年中行事に関わる一級史料『親信卿記』の研究

本体 九、八〇〇円

谷昇 著

後鳥羽院政の展開と儀礼

公事と宗教儀礼の中に具現する上皇の政治理念を検証

本体 六、〇〇〇円

山中裕 著

源氏物語の史的研究

王朝文化・有職故実研究の第一人者が源氏物語を史的に読み解く

本体 九、二〇〇円

森新之介 著

摂関院政期思想史研究

摂関院政期における民衆仏教史観の実像を鋭く描き出す

本体 六、五〇〇円

高木博志（京都大学教授）編

近代天皇制と社会

10月刊行

A5判上製・五三六頁／予価七、三〇〇円

天皇が国家の頂点に立った近代、天皇制は人々にどのように受け入れられていったのか。

社会における受容のありよう、権威を高めていった顕彰という行為の具体的検証を通して、天皇不在の社会へ天皇制が浸透していく過程を描き出す。

明治維新から戦後まで、現代の象徴天皇制へとつながる近代天皇制を、「社会」をキーワードに検討する意欲作。

小股憲明著

明治期における不敬事件の研究

228事例と13参考事例を整理・検討し、明治国家の特質を考察

本体 一三、〇〇〇円

富永望著

象徴天皇制の形成と定着

新憲法運用の積み重ねにより形成されたことを実証する気鋭の書

本体 四、八〇〇円

【もくじ】

序論に代えて——近代天皇制と顕彰 ● 高木博志

神武陵と橿原神宮の周辺——国家神道・教派神道再考 ● 幡鎌一弘

神功皇后伝説の地域的展開と「皇国」意識——金沢の八幡信仰とその表象 ● 本康宏史

明治前期の陵墓・皇霊祭祀の特質 ● 上田長生

明治期における地域の楠公父子顕彰 ● 尾谷雅比古

近代遙拝所と地域社会——奈良県下の事例を中心として ● 市川秀之

神国大博覧会開催計画とその行方——昭和初期における松江観光都市化戦略とその帰結 ● 能川泰治

中島久万吉筆禍事件の社会的背景 ● 廣木尚

「国体明徴」と宗教運動 ● 福家崇洋

明治維新と画壇の再編 ● 中野慎之

森有礼「不敬」・暗殺事件顛末——虚実の報道を通して ● 田中智子

明治中期の皇室と社会——長野県横川山御料林における天皇・皇室の「不在」 ● 池田さなえ

近代天皇制と大麻問題 ● ジョン・ブリン

大正・昭和戦前期の伊勢神宮参拝の動向——娯楽とナショナリズムの両側面から ● 平山昇

天皇制ファシズムと地域社会——「勝つために戦ふ村」の虚構と現実 ● 遠藤俊六

三笠宮の「史学会発言」と社会 ● 河西秀哉

長谷川精一著

森有礼における国民的主体の創出

外国語の史料や文献も利用し、森有礼の言説や政策目的を検討

本体 九、〇〇〇円

真辺将之著

西村茂樹研究——明治啓蒙思想と国民道徳論——

西村茂樹の時代状況に応じた問題意識の変遷と主張の展開を明示

本体 七、八〇〇円

京都大学文学部日本史研究室編
吉田清成関係文書研究会編集・解説

吉田清成関係文書七 書翰篇5・書類篇3

9月刊行

A5判上製函入・五八六頁／本体 二、〇〇〇円

佐野真由子（国際日本文化研究センター准教授）著

幕末外交儀礼の研究 —欧米外交官たちの将軍拝謁—

四六判上製・四三頁／本体 五、〇〇〇円

鮫島文書研究会編

鮫島尚信在欧外交書簡録

明治初期におけるわが国の現地外交の実態を知る上で貴重な史料集

本体 二、八〇〇円

佐々木克・藤井譲治・三澤純・谷川穰編

岩倉具視関係史料「全2巻」

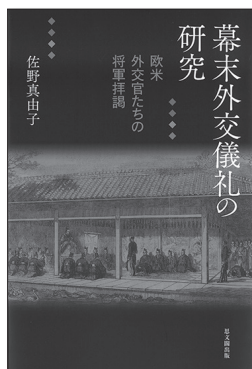
憲政資料室所蔵文書などに次ぐ第4の岩倉具視関係文書群を活字化

本体 二四、〇〇〇円

京都大学日本史研究室が所蔵する

「吉田清成関係文書」のほぼ全体を翻刻する全7巻構成の最終巻。

「収録書翰」青木周蔵・浅田徳則・伊藤博文・伊藤巳代治・井上馨・岩倉具視・上野景範・大久保利通・大隅重信・大島圭介・大山綱昌・岡田令高・海江田真義・川村純義・北代正臣・日下義雄・熊谷武五郎・黒田清隆・五代友厚・西郷従道・斎藤修一郎・三条実美・渋沢栄一・高平小五郎・寺師宗徳・寺島宗則・徳大寺実則・得能良介・中井弘・花房義質・松方正義・柳谷謙太郎・吉田二郎



幕末外交儀礼の研究

欧米
外交官たちの
将軍拝謁
佐野真由子

徳川幕府終焉まで計17例を数えた、欧米諸国の外交官による将軍拝謁。政治交渉の過程とは異なる次元で展開した外交儀礼の形成過程から見る、もう一つの幕末史。

第23回日本比較文学会賞受賞

宮間純一著

戊辰内乱期の社会—佐幕と勤王のあいだ—

新出史料を活用し、様々な思想が錯乱する内乱期の社会像を描出

本体 七五〇円

佐藤隆一著

幕末期の老中と情報

—水野忠精による風聞探索活動を中心に—

本体 九、五〇〇円

土井浩嗣（熊本学園大学准教授）著

植民地朝鮮の

勸農政策

8月刊行

A5判上製・四四八頁／本体 九、〇〇〇円



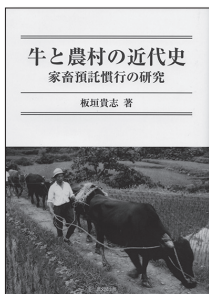
日本から始まった勸農政策は、どのように朝鮮に移植され独自の発展を遂げたのか。日露戦争から世界恐慌までの時期を対象とし、保護国期・植民地期における朝鮮の勸農政策の形成・展開過程を解明することによって、近年議論が硬直しがちな朝鮮植民地農政の再検討を試みる。

板垣貴志（島根大学准教授）著

牛と農村の近代史

—家畜預託慣行の研究—

A5判上製・二六六頁／本体 四、八〇〇円



明治以降の近代化のなかで発展から取り残された中国山地。そこでは前近代的ベールに包まれた家畜預託慣行が急激に拡大していた。牛を介して取り結ばれる人々の社会関係を明らかにし、それが近代農村で果たした歴史的義を解明する。そして、歴史の片隅へ押し流されながらも地域社会の調和と共存のために努めた名もなき農民群像を描く。

大島佐知子（関西農業史研究会所属）著

老農・中井太一郎と 農民たちの近代

A5判上製・三八八頁／本体 七、五〇〇円



農業近代化の過程で重要な役割を果たした「老農」といわれた農事改良者たちは近代化のなかで忘れられた存在である。除草機「太一車」の発明者として知られる中井太一郎について、ライフストーリーを丹念にたどりながら、彼の技術・思想や、その全国巡回を支えた組織・団体などを明らかにする。

一般社団法人和食文化国民会議 監修

和食手帖

7月刊行

新書判並製・一九二頁／本体 一、五〇〇円



和食の定義や歴史、食事マナーや調理方法、食材の特徴や資料など、教養から実践のための知識まで幅広く収めた一冊。

【内容】和食とはなにか／日常の和食／和食の食材／加工食品／各地の食／食に関する資料

増田徳兵衛（日本酒造組合中央会監事）著

和食と日本酒

【和食文化ブックレット⑩】

11月刊行予定

A5判並製・九六頁／本体 九〇〇円



こまめ
國酒とされる日本酒。日本の風土によって生み出された日本酒には、和食同様長い歴史がある。日本酒のもつ歴史・文化・造り方・楽しみ方について学ぶ。ブックレットシリーズ第10弾（完結）。

【内容】自然が育む日本酒の文化／日本酒造り／和食と日本酒／日本酒を楽しむ／日本酒の効用

熊倉功夫（国立民族学博物館名誉教授）著

熊倉功夫著作集 第7巻

日本料理文化史

A5判上製・三八八頁／本体 七、〇〇〇円



茶の湯を軸として文化史の本質を明らかにしていくシリーズ最終巻。

【内容】Ⅰ日本料理文化史／Ⅱ日本の食文化を考える／Ⅲ料理と茶の湯／Ⅳ京都・菓子・お茶

尼崎博正 (京都造形芸術大学教授)

麓和善 (名古屋工業大学教授)

矢ヶ崎善太郎 (京都工芸繊維大学教授) 編著

庭と建築の煎茶文化

—近代数寄空間をよみてく—

10月刊行予定

A5判上製・三五〇頁／本体五、五〇〇円

桐浴邦夫 (京都建築専門学校副校長) 著

茶の湯空間の近代

—世界を見据えた和風建築—

2月刊行

A5判上製・二八〇頁／本体五、八〇〇円

小野芳朗 (京都工芸繊維大学教授)

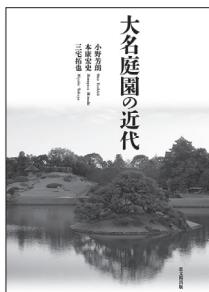
本康宏史 (金沢星稜大学教授)

三宅拓也 (京都工芸繊維大学助教) 著

大名庭園の近代

6月刊行

A5判上製・四七二頁／本体八、〇〇〇円



大名庭園が語られるとき、お殿様がいた近世に注目が集まるのに対し、近代はまったく忘れられてきたのではないか？しかし、明治・大正・昭和という激動の時代をくぐりぬけるあいだに、大きな変容をとげている。
大名庭園のいまを知るために決して見落とすことができない近代の歴史を掘り起こす。



高度な技術と類まれな空間構成と意匠をもつ数寄屋建築は、近代において世界から高い注目を集めるようになった。
本書は、近代数寄屋建築の数少ない専門家である著者が、茶の湯の系譜を考慮しつつ、「茶の湯空間」が近代においてどのように理解されてきたのかを読み解く試み。

煎茶の流行、茶の湯(抹茶)の復興——、近代茶道界はまさに煎茶・抹茶がせめぎ合い、融合する時代であった。
庭・建築に取り入れられた煎茶的な趣向は、茶の湯の世界と融合し、新たな近代数寄空間を形成していった。これまで茶の湯の視座からのみ語られてきた近代数寄空間を煎茶的要素に注目して新たに読み解く。

並木誠士（京都工芸繊維大学教授）編

近代京都の美術工芸

制作・流通・鑑賞―

12月刊行予定

A5判上製・六〇八頁／本体二、八〇〇円

並木誠士（京都工芸繊維大学教授）

青木美保子（京都女子大学准教授）編

京都 近代美術工芸の ネットワーク

A5判並製・三三二頁／本体二、五〇〇円



人を中心とした、近代京都の美術工芸にまつわるヒト・モノ・コトのネットワークの軌跡を辿る。ビッグネームだけでは構築されない美術工芸の現場をあぶり出すことにより、よりヴィヴィッドな美術史が見えてくる。

藤田治彦責任編集

アーツ・アンド・クラフツと日本

デザイン・工芸・美術・社会・産業・生活など立体的な関係と考察

本体二、九〇〇円

藤田治彦責任編集

近代工芸運動とデザイン史

各国における芸術分野での歴史・重要な動向を解き明かす

本体二、九〇〇円

ダーティントン・ホール・トラスト、ピーター・コックス編

ダーティントン国際工芸家会議報告書

―陶芸と染織・1952年―

本文篇で翻訳を、資料篇で原典および関連資料を掲載

本体八、五〇〇円

ジャポニスム学会編

ジャポニスム入門

絵画・工芸以外の分野も射程に入れ、ジャポニスムの全体像に迫る

本体二、八〇〇円

明治時代の京都における美術・工芸を、制作・流通・鑑賞という三つの視点から分析し、京都における美術・工芸の近代化の実態にせまる。作品・作家研究に加えて、近代の特性としての学校教育や科学的知識の導入など（制作）、博覧会や雑誌メディアなど（流通）、生活空間の変化や趣味の問題など（鑑賞）をも視野に入れて、多角的観点から近代京都の美術・工芸の展開を明らかにする。

三浦俊介（立命館大学非常勤講師）著

神話文学の展開

— 貴船神話研究序説 —

11月刊行予定

A5判上製・四六八頁／本体 二、〇〇〇円

斎藤英喜（佛敎大学教授）編

神話・伝承学への招待

A5判並製・二六六頁／本体 二、三〇〇円

斎藤英喜（佛敎大学教授）

井上隆弘（佛敎大学嘱託研究員）編

神楽と祭文の中世

— 変容する信仰のかたち —

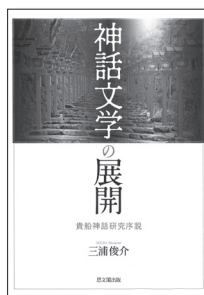
A5判上製・三九〇頁／本体 八、〇〇〇円



「民俗芸能」と呼ばれ、古代以来伝わるものとされる「神楽」。それらの深層を探ると、そこには混沌とした「中世」の信仰のかたちが現れる。中世の信仰と思想を伝える「祭文」を中心に、中世神楽および関連する陰陽道・密教・アジアの巫俗の世界を読み解く。



これまで別々のジャンルで扱われてきた「神話」と「伝説」「昔話」について、総合的・学問的に研究する「神話・伝承学」。本書は11の章と7のコラムにより、魅力ある「神話・伝承学」の世界へ誘う格好の入門書。



古代日本の「記紀神話」、神社内で作成され管理された「神社神話」、中世日本の各種資料に見える神話の異伝、毘沙門天が登場する「仏敎神話」、中世神話『貴船の本地』などを多角的に論じる。「神話」を通して日本文学を豊かに読み解く上で、必読の一書。

神戸女子大学古典芸能研究センター編

神戸女子大学古典芸能研究センター研究資料集2

絵入謡本と能狂言絵

10月刊行予定

B5判上製・二四八頁／予価四、五〇〇円

神戸女子大学古典芸能研究センターおよび同大学図書館が所蔵する『絵入謡本』『能狂言画帖』『能狂言絵巻』『能狂言図巻』の絵画部分をオールカラーで掲載。さらに解題と詞章の翻刻を付す。いずれも能・狂言の内容を絵画化した興味深い作品で、とりわけ『絵入謡本』は加賀前田家旧蔵という確かな伝来を持つ優品。

MIHOMUSEUM編

猿楽と面―大和・近江および白山の周辺から―

平安後期～安土桃山時代の350点の「面（おもて）」をカラー掲載

本体三、二〇〇円

森田都紀著

能管の演奏技法と伝承

能管（笛）を中心とする能楽演出の形成過程を歴史的に解明

本体八、〇〇〇円

三島暁子著

天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史

権威の象徴「笙」に関わる音の文化を論考

本体六、六〇〇円

岡田万里子著

京舞井上流の誕生

流派の歴史を検証し、伝承作品群の成立背景を考証する

本体九、〇〇〇円



『絵入謡本』松風より

2018年冬〜2019年春 主な刊行予定

オリエントの東^(仮)

ジラルデッリ青木美由紀編著

住吉如慶筆 伊勢物語絵巻

河田昌之編

文人画

往還する美

河野元昭著

住友史料叢書 33

住友史料館編

賢者の王国 愚者の浄土

―日本中世誓願の系譜―

工藤美和子著

戦国・織豊期

大坂の都市史的研究

大澤研一著

古代寺院史の研究

菱田哲郎・吉川真司編

幽霊の歴史文化学^(仮)

小山聡子・松本健太郎編

北野天満宮 信仰と名宝

―天神さんの源流―

京都文化博物館編

琉球の船と首里・那覇を描いた

絵画史料研究

琉球の船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編

説話文学と歴史史料の間に^(仮)

倉本一宏編

植民地帝国日本における

知と権力^(仮)

松田利彦編

田中久重と技術の継承^(仮)

河本信雄著

園城寺の仏像 第四巻 鎌倉彫刻篇

園城寺の仏像編纂委員会編

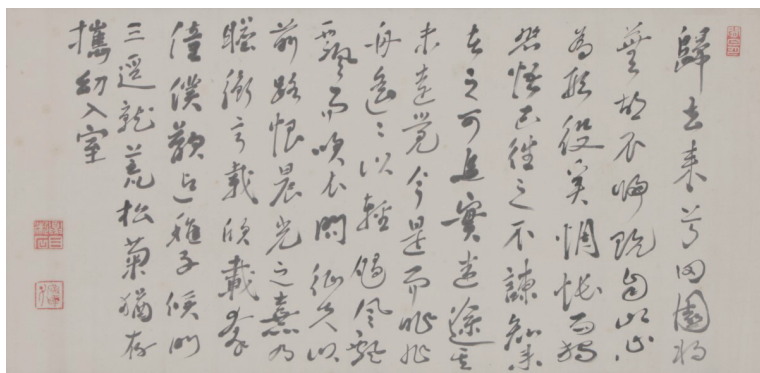
東寺廿一口供僧方評定引付 第四巻

(第一期完結)

伊藤俊一・富田正弘・本多俊彦編

思文閣グループの
逸品紹介

美の縁



夏目漱石 帰去来辞之一節

漱石は、幼少期から好んで漢文を学び、生涯を通じて作詞も多く行った。唐の詩人を好んだ中でも、とりわけ愛好したのは陶淵明である。漱石の作詩は特に晩年にその数を増すが、陶淵明の詩句に影響を受けたものも多々見られることが指摘されている。本作に書かれたのは陶淵明「帰去来辞」の冒頭の一節。大正五年頃、雑誌編集者の滝田樗陰が漱石に数枚「帰去来辞」を書かせており、本作もそのうちの一枚かもしれない。

「帰去来辞」は、県令に着任したものの、役人であることに性分が合わなかった陶淵明が、離職し、田舎に戻った際の思いを詠ったものである。役人を辞めた現在が正しい生活なのだ、と悠々自適の隠遁生活を謳歌し、天命を素直に受け入れ楽しむ境地を賛美する。本作では「さあ、帰ろう」という初句に始まり、過ぎたことを悔やんでも仕方がない、これからの心がけ一つでどうとでもなる、と呼びかける句が書かれる。漱石は陶淵明の詩句のみならず、その生き様にも憧れていたという。不平不満が尽きなかった教職員生活など、「帰去来辞」に描かれた境地を幾度も夢見たのであろう。

思文閣 査定申込みアプリ

お手持ちのスマートフォン・タブレットで簡単に査定申込みができる。
「お宝鑑定! 思文閣・美術品査定申込(アプリ)」をリニューアルいたしました。



- 画面をサンプルに見やすく改定いたしました。
- 撮影がイデの方真品追加変更いたしました。
- iOS版がiPhone・iPad両方で利用できるようになりました。
- ※のd版をお使いの方は、iOS版の新規ダウンロードをお願いいたします。



「思文閣」で検索、無料ダウンロード

SHIBUNKAKU
思文閣



我々思文閣は日本の優れた文化を
育み、伝え、広める事により一人でも多くの人々に
感動と豊かな心を与え続ける企業を目指します。

SHIBUNKAKU

思文閣

京都市東山区古門前通大和路東入元町355

TEL (075) 531-0001 FAX (075) 531-5533

<https://www.shibunkaku.co.jp/>

info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録



鹿見島之天盃頂戴図 三枚続
蔵 鎮 征

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・
錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております
(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い
合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和路東入元町355

TEL (075) 752-0005 FAX (075) 525-7155

<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>

kosho@shibunkaku.co.jp



ぎやらい思文閣では、絵画・陶芸など
様々な展覧会を開催いたします。
皆様のお越しを心よりお待ちしております。

ぎやらい思文閣

京都市東山区古門前通大和路東入元町386

TEL (075) 761-0001 gallery@shibunkaku.co.jp

www.shibunkaku.co.jp/gallery/